死後の世界

死後の世界

「人が死んだら、再び生きるだろうか？」
ヨブ記14章14節

死後の生命の可能性ほど、普遍的で切迫した関心事はない。これは、死そのものが普遍的であり、理性的な人間は皆、生き続けたいと願うからである。通常の状況下では、誰も死を望まないが、人間の予見の範囲内では、死は人類のすべての成員を待っている。したがって、死後の生命の有無は、すべての人の心の中にあり、多くの人の口に上る問題である。

時代を超えて、男性も女性も、愛する者の死への絶望と、自分自身の死という不可避の運命への確信から、　あらゆる哲学を考案してきました。これは、恐怖を和らげ、悲惨な現実の真実を否定するためです。彼らは、死は表面に見えるものとは異なるものだと信じようとしました。死は敵ではなく友であり、人類がより高次元の生命の領域へ移行するための手段だと。

繰り返し、学識ある者も無学な者も、　死者はどこにいるのか？人が死んだ時、一体何が起こるのか？死者は生きている者よりも生きているのか？と問いかけてきました。数千年前、預言者ヨブは「人が死んだ時、再び生きるのか？」と問いました。（ヨブ14:14）。このように、神の預言者は、愛する者を失った無数の悲しむ者たち、そして人類すべてと同様に、確実な死の到来を恐れる者たちの代弁者として語った。

ヨブは、自分の質問「人が死んだら、再び生きるのか？」の答えに、個人的で切実な関心を持っていました。なぜなら、彼は神に死を許すよう求めたばかりだったからです。ヨブは生きること自体に疲れていたわけではなく、苦しみによって消耗し尽くし、そのような状況下での人生が価値あるものかどうか疑問に思っていたのです。

ヤコブは書きました。「あなたはヨブの忍耐について聞いたことがあるでしょう。」（ヤコブ5:11）ジョブは忍耐が必要でした。なぜなら、神は彼に極めて厳しい災いを許されたからです。彼の家畜、家財、家族はすべて失われました。彼は健康を失い、全身を覆う醜い皮膚病に冒されました。最後に、彼

の妻は彼に背き、「神を呪って死ね」と言いました（ジョブ2:9）。

しかし、ヨブは神を呪うつもりはありませんでした。彼は、なぜ自分がこれほどまでに苦難を許されたのか理解できなかったにもかかわらず、神を信頼していました。 当然ながら、もしそれが神の御心であれば、苦難から解放されることを求めたので、彼は祈りました。「ああ、あなたが私を墓に隠してくださり、あなたの怒りが過ぎ去るまで私を秘密にしておいてくださり、私にご指定の時間を定め、私を覚えてくださるように！」ヨブ14:13

このように神に死を許すよう求めた後、ヨブは神が祈りを聞き入れ、死を許した場合、何が起こるかを考えました。そこで彼は尋ねました。「人が死んだら、再び生きるだろうか？」ヨブは自身の経験と感情から語りましたが、神の預言者として、彼の言葉は神から啓示されたものです。したがって、彼は死後の生命に関する質問を、神の言葉の真理に一致した形で表現したことがわかります。

したがって、重要な点は、ヨブが「もし人が死んだら、彼は以前より生きているのか？」と尋ねなかったことです。また、「もし人が死んだら、それは

単に別の部屋に移っただけなのか、天国に行ったのか、それとも苦悩の場所に行ったのか？」とも尋ねませんでした。ヨブは人が死んだら死んだことを知っていたため、彼が尋ねた質問は「もし人が死んだら、再び生きるのか？」でした。

このように、聖書の偉大な根本的な真理が私たちの注意に提示されます。すなわち、死後の生命　は、死者の復活、すなわち死者の目覚めにかかっているということです。死後の生命への希望は、死が存在しないからではなく、神がご自身の強力な力を使って死者を生命に回復させることを約束されたからです。ヨブは、もしさらに苦しみから逃れるために死を許されるなら、神が後に彼を生き返らせることを知っていました。彼はさらに次のように言いました。「私の定められた日のすべての日を、私は死の中で待ち続ける。私の変化（死から命への変化）が来るまで。あなたは呼び、私は答える。あなたは、あなたの手の業に望みを置く。」ヨブ14:14,15

復活の希望

ヨブが、神が自らの定められた時に死から彼を呼び起こすという確信は、死後の生命に関する神の言葉の全体的な証言と完全に一致しています。この復

活の希望は、新約聖書において、これほど明確に、そして慰めのある確信をもって示されています。

使徒パウロは書きました。「人間によって死が来たように、人間によって死者の復活も来た。」（コリント人への第一の手紙15:21）。この文中の「二人」とは、アダムとイエスを指します。アダムは神の律法を破り、自身と子孫に死の罰をもたらしました。イエスは罪人の代わりに死に、 thus 死から解放される可能性を、復活によってアダムの な人類に与えました。これがパウロが「罪の報酬は死である。しかし、神の賜物は、私たちの主イエス・キリストによる永遠の命である」と書いた意味です（ローマ人への手紙6:23）。

死者の復活は、死後の生命の確信にとって極めて重要であるため、使徒パウロはキリスト者について書き、もし復活がなければ「キリストに眠りについた者たちも滅びる」と強調しました（コリント人への第一の手紙15:18）。これは単に、もし復活がなければ、現在キリストを信じ、その足跡に従う者たちも死によって滅びることを意味します。

なぜ混乱が生じるのか？

聖書が、死後の命の希望が神の約束――死者を復活させて命を与えること――に基づいていると明確に教えているにもかかわらず、なぜ聖書の教えを信じるという人々がこの問題について混乱しているのか、という疑問が自然に生じます。この混乱の根源はエデンの園にあります。

神はアダムに言われました。「善悪の知識の木の実を食べてはならない。なぜなら、あなたがそれを食べたその日、あなたは必ず死ぬからだ。」（創世記2:17）。その後、サタンは蛇を通じてエバに尋ねました。「神は『園のすべての木の実を食べてはならない』と仰いましたか？」（創世記3:1）。エバは神の言葉を繰り返し、不従順の罰として死が与えられることも確認しました。2節、3節

その後、サタンはエバに答えて言った。「あなたは決して死なない。」（創世記3:4）。これは創造主の言葉を否定するものでした。実質的に、サタンは神が「不従順の罰として死が与えられる」と述べたことを嘘だと非難したのです。おそらくサタンは、何らかの方法で神の目的である人間へ

の死の罰を阻止できると信じていたかもしれません。しかし、その試みは無駄であることがすぐに判明しました。なぜなら、人類は死に始めました。

しかし、サタンは自分が間違っていたと認めませんでした。代わりに、彼は人間の代理者を通じて、死は表面上に見えるものとは異なり、実際には死は存在しないという宣伝を流布し始めました。彼が人々をこの信念に導くことができた範囲で、彼はエバに「あなたは決して死なない」と言った時、真実を語ったことを証明することになりました。つまり、「あなたは死んだように見えるだけだ。そして、死んだように見えた時、実際にはこれまで以上に生きている」と。

神の言葉に信頼を置く者にとって、エデンの園でなされた　な発言のうち、どちらを受け入れるべきか判断することは困難ではない。創造主が「あなたがそれを食べれば、あなたは必ず死ぬ」と宣言したことは、神が真実を語ったことを私たちは知っている。サタンが「あなたは決して死なない」と言ったことは、彼が真実を語らなかったことを私たちは知っている。イエスはサタンについて「彼は偽り者であり、その父である」と述べました。ヨハネ8:44

サタンは単に嘘つきであるだけでなく、イエスが宣言したように、彼は「その父」です。要するに、サタンは最初の嘘を産み出したのであり、それは史上最も破壊的で広範な影響を及ぼした嘘でした。この偽りは、エデンの園から発し、すべての民族と宗教の人々の心の中で死に関する真実を歪めてきました。一方、神が「あなたは必ず死ぬ」と述べた真実を信じたのは、比較的に少数の人々だけです。

「分離した存在」の虚偽

人間の身体が死に至ることは、誰もが明白に認識していました。サタンは、この点において人々を欺くことが不可能であることを知っていたため、人間の身体の中に身体とは別個の何かが存在し、その何かが死後に身体から離れて生き続けるという考えを広め始めました。キリスト教の　　（自由思想）のcircles（団体）では、この定義不能な何かを「不滅の魂」と呼んでいます。

古代エジプト人はこの見解を信じていました。その後、ギリシャの哲学者によって採用され、使徒たちが死によって眠りについた後、異教の哲学者によってキリスト教教会に導入されました。様々な形で説明されてきましたが、人間の中に死なない何かが

存在し、したがって死はないというこの理論は、すべての異教の宗教家の共通の信仰でした。

聖書は、ソロモンの時代に異教徒の間でこの考えが広まっていたことを示しており、彼はこの誤りを真実で反論しています。彼は次のように書きました。「人間の息子たちに起こることは、獣にも起こる。彼らには同じことが起こる。一つが死ぬと、もう一つも死ぬ。彼らは皆、一つの息を持っている。したがって、人間は獣よりも優れていない。すべては空しい。すべては一つの場所へ行く。すべては塵から成り、再び塵へ帰る。人の霊が上へ昇り、獣の霊が地へ下ることを、誰が知ろうか（または証明できようか）？」伝道者の書3:19-21

ソロモンは神の真理を明確に述べ、死において人間と獣は同じであり、すべてが同じ息、すなわち「霊」を持っていると断言しています。この「霊」は、21節で同じヘブライ語が翻訳されています。このように真理を 述べた後、彼は「誰がそれを証明できるか」と問います。彼は明らかに、周囲の異教の諸国が異なる信念を抱いていたことを知っていた。彼らはサタンの嘘を信じ、死は存在せず、身体が死んでも「霊」が「上へ」昇り、生き続けると主張していた。しかしソロモンは、これが真実ではないと示

す。彼はむしろ、死において人間と獣は同じであると述べる。人間の獣に対する優越性は、神が死んだ人間を復活によって生き返らせることを約束した点にあり、下等な動物に対しては同じ約束をしていない点にあります。

「不滅の魂」はない

「不滅の魂」という表現は聖書には登場せず、聖書は人間の中に「分離した存在」が宿り、身体が死んだ後に別の場所で生きることを教えることもありません。聖書で「魂」という言葉が初めて使われたのは、創世記2章7節です。このテキストでは、神が人間の体を地の塵から創造し、その鼻の穴に「命の息」を吹き込み、人間が「生きる魂」となったと記されています。

「生きている魂」とは、単に生きている存在、または生き物であり、このテキストが示すように、生命の息と有機体（身体）の結合から生じるものです。身体は魂ではありません。生命の息は「　」魂ではありません。神のご加護と力によって、息が身体に生命を与える時、その二つの結合が「生きている魂」となるのです。

ソロモンは、人間と獣は同じ息を持っていると言いました。彼は正しいです。洪水で滅ぼされた人間と下等動物について、次のように記されています。「地の上を動くすべての肉は死んだ。鳥、家畜、獣、地を這うすべての這うもの、およびすべての人の鼻に命の息があったものは、地の上の乾いた地にあるすべてのものが死んだ。」 Genesis 7:21,22

なぜなら、獣の創造物は、人間が生きるための同じ「命の息」によって生きているからである。したがって、すべての動物も「生きている魂」であり、これは神の言葉によって明確に確立されている。この重要な真理は、聖書の翻訳の不一致によって、聖書を軽く読む者から隠されている。例えば、創世記1:24には次のように記されている。「神は言われた、『地は、その種類に従って、生き物を生み出せ。家畜、這うもの、地を這う獣、その種類に従って』。そして、そのようになった。」

この文における「生き物」という表現は、創世記2章7節でアダムを指す「生きている魂」と翻訳されたのと同じヘブライ語の単語の翻訳です。ここで使われている単語は　で、「生き物」と「魂」の両方がヘブライ語の*「ネフェシュ」*の翻訳です。翻訳者が、聖書が根拠としない人間と獣の区別を明確にし

ようとしたため、下等な動物を指す際には「生き物」という語を用い、人間を指す際には「魂」という語を用いたのである。ソロモンが「一つが死ぬように、もう一つも死ぬ」と書いたのも不思議ではない。

アダムが死んだ時、その体は塵に戻りました――「あなたは塵であり、塵に返る」。（創世記3:19）。神から与えられた生きる権利は、神が彼の鼻に吹き込んだ息によって実現され、神に戻りました。ソロモンは、人が死ぬ時の状況を説明して、次のように明確に述べています。「すると、塵は元の地に戻り、霊はそれを与えた神に戻ります。」伝道者の書12:7

このテキストに示された単純な真理は、多くの人の心で「霊」という言葉の誤解によって混乱している。この言葉は、単に「息」を意味するヘブライ語を翻訳したもので、この場合、目に見えない生命の力を指す。マルスの丘での説教で、パウロは「神の中に、私たちは生き、動き、存在している」と述べた。使徒行伝17:28

このテキストは、人が死んだ際に、意識を持った存在が身体から離れ、天の神に迎え入れられるという可能性を、 slightest にも示唆していません。本文

で使用されている「戻る」という言葉は、そのような解釈の可能性を排除しています。体は塵から来たため、塵に戻ります。もし「霊」が神に戻った別個の実体であれば、それは意識的な存在が以前神と共に住み、一時的に人間の体に宿ることを許されたことを意味します。そのような結論は、いかに不合理なものでしょうか！

しかし、ソロモンの死の定義は、聖書に記された人間の生きている魂、または存在に関する事実と一致しています。身体と息が元の源に戻ると、人間は存在しなかったかのように残されます。生きている魂、または存在は、もはや存在しません。それは死んだのであり、死は罪の罰です。エゼキエル18:4は「罪を犯す魂は、死ななければならない」と宣言しています。

死が「眠り」に置き換えられた

神が死んだ人間を復活させることを約束しているため、聖書は死んだ者を「眠っている」と表現します。この聖書の重要な真理は、イエスがマルタとマリアの兄弟ラザロの死について言及した際に強調されています。彼は弟子たちに言いました、 「私たちの友ラザロは眠っている」。弟子たちはイエスが自

然の眠りを指していると思ったため、イエスは彼らに明確に言いました。「ラザロは死んだ。」ヨハネ11:11-14

このように、イエスは神の言葉の基本的な教えの一つを明らかにしました。ラザロは死んでいましたが、同時に「眠っている」のでした。神がアダムに「不従順は死を招く」と告げた時、「あなたは必ず死ぬ」とは、生命の消滅を指していました。この生命の消滅は永久的なものだったでしょうが、神が人間を依然として愛し、愛する御子を与えたことにより、死からの贖いと救い主として提供されたため、そうならなかったのです。ヨハネ3:16；第一テモテ2:3-6

イエスは、世界の命のために、ご自身の「肉」、すなわち人間性を与えられました。(ヨハネ6:51)。これにより、アダムとその子孫に対して下された死の判決が取り消される道が備えられました。そして、すべての人々が死を続けるものの、キリスト・イエスによる贖いによって、死者の復活が約束されています。死者が復活するからこそ、聖書は彼らの生命の暫定的な欠如を「眠り」と表現しています。

眠っている者は無意識であり、死んだ者も同様です。彼らは何も見えず、聞こえず、知りません。聖

書は言います。「生きている者は、自分が死ぬことを知っている。しかし、死んだ者は何もしらない。」（伝道者の書9:5）。眠っている者は目覚めることができるので、死によって「眠っている」者も、目覚めることができ、目覚めるでしょう。イエスはラザロについて「私は彼を起こすために行く」と言いました（ヨハネ11:11）。したがって、死によって「眠っている」すべての人は、神の力によって、地球の新しい日の朝に目覚めさせられるのです。そのため、私たちは「涙は夜を過ごすかもしれないが、喜びは朝に訪れる」と読みます（詩篇30:5）。

マルタを慰める

イエスとベタニアの小さな家族——マルタ、マリア、ラザロ——は特別な友人でした。ラザロが病気になった時、イエスと弟子たちはベタニアから離れたガリラヤにいました。姉妹たちはラザロの病気についてイエスに知らせましたが、彼はすぐに彼らのもとへ行きませんでした。二日間待った後、ラザロが死んだことを告げ、彼は「眠っている」と言い、彼を「眠りから覚ます」ためにいくと宣言しました。

マルタはイエスが家 towards 近づいてくるのを見て、外へ出ました。優しく非難しながら、彼女は言いました。「主よ、あなたがここにいてくださっていたら、私の兄弟は死ななかったでしょう。」（ヨハネ11:21）。マルタは心を痛めており、これはイエスが彼女を慰める絶好の機会でした。 イエスはそうしました。しかし、このマルタの大きな必要の時に、主は彼女にどのような慰めの言葉をかけられたのでしょうか？イエスは、同様の状況下でよく言われるように、「マルタ、あなたの兄は本当に死んでいない。彼は単に外側の殻、つまり体を脱ぎ捨てただけだ」と述べたでしょうか？イエスは、本当のラザロがこれまで以上に生きていると述べたでしょうか？彼はマルタに、ラザロの「魂」が近くを漂っている可能性が高いと述べたでしょうか？彼は「マルタ、死はない」と述べたでしょうか？

いいえ、イエスはそんなことは言いませんでした。イエスは以前、弟子たちに「ラザロは死んだ」と述べており、今になってその真実を否定して「あなたの兄弟は今までにないほど生きている」とマーサに言うことはなかったのです。イエスがマーサを慰めるために言ったことは、神の言葉の全体的な証言と一致していました。ラザロが実際に死んでいるこ

とを知っていたイエスは、マーサに「あなたの兄弟は再び生き返る」と言いました。23節

ラザロが再び生きるためには、命を回復させられる必要がありました。イエスは妹に、それが実現すると確約しました：「あなたの兄弟は再び生き返る」。マルタはイエスが何を意味しているのか確信できませんでした。彼女はイエスが死の眠りから他の人々を目覚めさせたことを知っており、イエスに「あなたが神に求めることは何でも、神は与えてくださいます」と述べたことがありました。しかし、イエスがまさにその時に神にラザロを死の眠りから目覚めさせるよう求めるかどうかは確信できませんでした。 therefore, she , replied, “I know that he shall rise again in the resurrection at the last day.” verses 22-24

マルタは、すべての死者が復活する一般的な復活があることを知っていました。そして、その時にラザロが死の眠りから目覚めることも知っていました。彼女は旧約聖書に記録された約束に精通しており、イエスの教えに敬虔で信仰深い注意を払っていたため、全人類に栄光ある復活の希望があることを知っていました。

マルタはまた、一般的な復活が「最後の日に」起こることを理解していました。最後の日は、多くの人々が思っているような「審判の日」ではありません。この場合の「日」という言葉は、時代や時代を指し、神の人類を罪と死から贖い救うための偉大な計画における最終的な時代を意味します。

神の救いの計画にはさまざまな時代があります。イエスの最初の降臨以前は、家長時代、そしてユダヤ時代がありました。キリストの最初の到来から、福音時代が始まりました。これらは、神の計画の最終時代、すなわち「最後の日」、　神の計画が、死者の復活と、そのときにキリストの王国の律法に信じ従う者すべての生命の完全な回復によって完成する時期に向けて、神が協力者たちを選び、準備した準備の時代でした。

マーサは、神の計画におけるこの最後の時代、すなわち最後の日について知っており、彼女の兄、そして死んだ者たちが皆、死の眠りから目覚めることを知っていました。しかし、イエスが「あなたの兄は再び生き返る」と言ったのが、そのことを意味しているかどうか、マーサは知りませんでした。イエスは彼女に直接、自分の直近の意図を説明しませんでした。代わりに、彼はこう答えました。「私は復

活であり、命です。私を信じる者は、死んでも生きる。そして、私を信じる者は、決して死なない。」（25、26節）。マルタは最後の日に起こる一般的な復活への信仰を表明していました。今、イエスは自分が「復活であり、命である」と説明しました。すなわち、最後の日に死者を蘇らせ、その時彼を信じるすべての人に永遠の命を与える者であるということです。

このマルタへの回答で、イエスは自分を通して命を受ける二つのグループについて言及しています。第一に、今信じているが死を迎える者たちです。これらについて、イエスはマルタに、彼らが死から目覚めさせられると約束しました。第二に、復活で目覚め、その後　彼を信じる者たちです。これらについて、イエスは、彼らは二度と死なないと述べました。25節、26節

イエスは、マルタに信者も不信者も復活に目覚めることを確信させた後、彼女に尋ねました。「あなたはこれを信じるか？」マルタは答えた。「はい、主よ。あなたはキリスト、神の御子であると信じます。」（26節、27節）。マーサは正しく理解していました。約束のメシヤ、すなわちキリストは、人類を死から救うためにこの世に送られること、そして

その救いは「死の中で眠る者たち」の復活によって成し遂げられることを。彼女はイエスが約束されたメシヤ、来たるべきキリストであり、その中に復活の力があることを信じていました。

ラザロの復活

マルタがイエスをメシヤとして信じ、死者を生き返らせる力があると告白した後、彼女は家に戻り、マリアにイエスに会うために一緒に来てほしいと頼みました。マリアもマルタと同様に、主に向かって言いました。「あなたがここにいてくださっていたら、私の兄弟は死ななかったでしょう。」（32節）。イエスは、この悲しみと大きな喪失の光景に心を打たれ、他の人々と共に泣きました。その後、ラザロが埋葬された墓に案内するよう求めました。

墓のそばに立っていたイエスは、入り口の前の石を動かしてくれと頼みました。するとマルタは反対しました。彼女は以前、イエスが兄を生き返らせることができると信仰を告白していましたが、今や疑い、イエスに言いました。「主よ、もう四日も経っています。彼は腐っています」（39節）。しかし、イエスにはそれは問題ではなかった。彼は、神の大いなる力が死んだ者すべてに最終

的に成し遂げることを示そうとしていた。神の大いなる力が働くところでは、人が四日間死んでいたか、数千年間死んでいたかは関係なかった。命は回復できる。命を最初に創造した方は、命を回復する力に満ちている。

開かれた墓の前で、適切な祈りを捧げた後、イエスは大きな声で叫びました。「ラザロ、出て来い。」（43節）。この記述で興味深いのは、ラザロについて言及されていない点です。ラザロが天に帰ったとは言っていません。ラザロは天に上ったわけではありません。彼は煉獄に戻ったとも書かれていません。彼は永遠の苦痛の深淵から解放されたとも書かれていません。永遠の苦痛の深淵は存在しません。

記録には、イエスが「ラザロ、出て来い……」と叫んだ時、「死んでいた者が出て来た」とあります。イエスは ラザロが死んだと述べていました。今や死んでいたラザロは、死の眠りから覚醒しました。墓の布から解放されたラザロは、以前と同じように家族や友人たちと交わり、共に過ごしました。命を回復した彼は、幻影や幽霊ではありませんでした。彼は以前と同じラザロでした。彼は再び生き返ったことを喜び、家族も彼を取り戻したことに喜びました。

「驚くな」

以前、死者の復活について語った際、イエスは次のように言いました。「このことを不思議に思わないでください。なぜなら、墓の中にいる者たちがみな、その声を聞いて出て来る時が来るからです。善を行った者は命の復活へ、悪を行った者は裁きの復活へ。」ヨハネ5:28,29。ここにおいて、ラザロが墓から呼び出されたように、すべての死者が一般の復活の時に呼び出されることが確約されています。

イエスはここで、復活における二つの一般的な分類についても言及しています――善を行った者と、悪を行った者、または善を行わなかった者です。善を行った者は、24節で「現在の時代の信者」と呼ばれています。彼らには永遠の命が与えられ、　、審判を受けることはありません。これは、信仰に基づいて信者はもはや死の裁き下に置かれておらず、復活における永遠の命が確約されていることを意味します。彼らは現在の生涯で試練を成功裡に通過するため、将来の審判を受けることはありません。

これらは、イエスの足跡に従って信仰し、忠実に従うことで「善」を行った者であり、死から「

命」の復活に召されるに値する者たちです。しかし、このように値しない者は、死から覚醒し審判を受けることになります。なぜなら、彼らの覚醒は世界の千年の審判の日に起こるからです。使徒行伝17:31；ペテロ第二3:8；黙示録20:6

ここでのギリシャ語は*「クリシス」*であり、「審判」と訳されています。現在、命に値する者でない者は、死の眠りから目覚めた際に危機に直面します。彼らは当然、関わる問題について完全に悟り、キリストを通じて与えられた命の恵みを受け入れ、キリストの王国が人類のすべての事柄を支配する際に適用されるキリストの王国の律法に従う機会が与えられます。もし彼らが受け入れ従うなら、彼らは人間の生命の完全さに回復され、永遠に生きるでしょう。これが彼らの完全な復活です。もし彼らが　受け入れ従わないなら、彼らは死に戻されます。ペテロはあの時について、従わない者たちは「民の中から滅ぼされる」と述べました。使徒行伝3:23

この時代の信者で、キリストと共に生き、支配するに値する者とされた者は、復活において「栄光と誉れと不死」に与るでしょう。（ローマ人への手紙2:7）不滅は、人間の固有の性質ではなく、イエスと共に苦しみ死んで、彼と共に生き支配するために

、その意志を示す者たちに与えられる栄光ある報いであることがわかります。イエスの王国における共同相続人として、彼らはその未来の審判の期間中、彼と共に審判者となるでしょう。コリント人への第一の手紙6:2,3；黙示録3:21；5:10

その後、不信の世は信じる機会を与えられ、死から目覚めた者たちがこの機会を与えられる。その時信じた者は、アダムが神の律法に背き、死の判決を受けた際に失われた人間の性質の完全さに回復され、永遠に地上において人間として生きる。黙示録21:4

これは神の計画の何という幸福な成就でしょう。なぜなら、これはエデンの園で　アダムの背きによってもたらされた罪と死の支配が永遠に続くのではなく、この長い悲しみの期間中に死んだすべての者が目覚めさせられ、神の律法に従い永遠に生きるための個々の機会が与えられることを意味するからです。

聖書は次のように述べています。　「神は世を愛し、独り子をお与えになった。それは、彼を信じる者が滅びることなく、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)。しかし、彼を信じるためには、彼

に関する明確な知識を受けなければならない。この知識は、死から目覚めた後の未来の審判の日に与えられる。これは人類にとって輝かしい希望であり、神の預言者ダビデは象徴的かつ美しくこれを示している。引用する：

「異邦人の間で、主が支配しておられると告げよ。世界もまた確立され、揺るがれることはない。彼は民を正しく裁かれる。天は喜び、地は喜べ。海は轟き、その満ちるものも共に轟け。野は喜び、その中のすべてのものは喜びなさい。そうすれば、森の木々はみな主の前に喜び歌う。……なぜなら、彼は地を裁くために来られるからである。彼は世界を義をもって裁き、民をその真実をもって裁かれる。」詩篇96:10-13

確かに、死後の生命がある。なぜなら、神の力によって死者は生命に回復されるからである。これが、神の言葉に示された私たちへの　な希望である。それは死者の復活の希望である。